

電信写

(1) 貴総理の言われる通りである。貴国の立場は良く承知しており、日本もサウデイ・アラビアも国際社会に対し、平和と安定について、常によびかけている国である。

(2) 今回の事件は不可思議である。サダム・フセインがクウェイトに侵攻するとは全く予期していなかった。サダムは事件の4日前に、自分とムバラク大統領に対し、イラクはクウェイト侵攻は行わないと明確に約束していた。自分は、サダムを17年も前から良く知っており、クウェイト問題についても緊密な対話を行なってきた。今回の事件の3か月前から、イラク・クウェイト間の対話がギクシャクしてきたので、自分は、両国の間に入り、問題が大きくならないよう最大限の努力を行つた。サダムも、せ非ちゆうかいしてほしいと言っていた。イラン及びイラクのような大国の間では対立が起こり得るが、クウェイトは小国であり、そのような小国に侵攻することは許されない。

(3) イラクがクウェイトに侵攻した前日には、両国の代表団が当国で解決のための会談を行つていた。イラクの代表団長は、自分に対して、クウェイトの問題は解決しうるものであり、両国関係は修復可能であると言っており、自分もそれを信じていた。その日は水よう日であつたが、ばんさん会で両国代表団は友好的に話をしていたし、土よう日にはバクグッドで、月よう日にはクウェイトで、話し合いを継続すると言つていたので、自分は安心していた。そしてばんさん会終了後、11時に両国代表団が当国を離れたが、そのよ
く日午前1時には、イラクがクウェイトに侵攻した。東部の軍関係者から情報が入つた時、自分はそれを直ぐには信じられなかつた。クウェイトが攻撃を受けたと聞いて、どこから攻撃を受けたのか、イランではないのか、本当にイラクなのか、と聞き直した程であつた。全くゆめを見ている様であつた。直ちにサダムに電話連絡を試みたが、連絡が取れないまま、4時にはイラクがクウェイト全土を占領してしまつた。その後、サダムと連絡が取れ、サダムはイブラヒム・イラク革命評議会議長を、当国に対する説明をさせるために派遣するといつてきた。

(4) イブラヒムは、よく日に当国にやつてきたが、クウェイトはイラクの一部であり、領土の一部が本国にもどつてきただけであり、問題はないと言つた。これに対し自分より、「クウェイトは200年前から存在しており、これが歴史である。その当時、イラクという国はなく、バクグッドやバスラというまちがあつただけである。クウェイトは1963年にはイラクによつて独立を承認され、国連及びアラブ連盟の加盟国として国際社会の正式なメンバーとなつた。」旨述べた。イブラヒムは、これに対し反論できず、「そのよ

電信写

うなことは、自分は承知していない。」と言つたので、自分（フェハド国王）は、「知らなければバグダッドに帰つて書類を調べろ。」と言つた。

(5) 1963年の両国の合意は、バクル・イラク大統領と現在のクウェイト首長のちち親であるサーバーハ首長との間で合意したものであり、当時サダムはバクル大統領のかたうでであり、合意の内容を承知しているはずである。因みに、バクルとサダムはいんせき関係にあり、即ち、バクルのあね（いもうと）がサダムののはは親という関係にある。従つて、サダムのクウェイト侵攻の理由は正しくはなく、弱にく強食以外の何物でもない。これは危険な原則であり、イラクがクウェイトから撤退せず、クウェイト正統政府が復帰できなければ、この危険な原則がまかり通ることになる。

(6) サダムに撤退を要求する様々な国際努力が行われており、最も最近では、ソ連の代表団が2日前イラクに出国して話をしているはずである。最も重要なのはサダムがイランとの関係において成したような実質的な一歩を、クウェイト問題においても、ふみ出してほしい。これまでの国連の諸決議が、サダムに、事態は深刻であると思ひ知らせる上で不十分とは思わないが、サダムは依然クウェイト撤退を真げんに考えてはいない。サダムは、国際的な動き、軍事的な緊張はあるものの、軍事力が自分に対しては使われるとは思っていないようだ。

(7) 国際社会全体にイラクのクウェイトからの撤退は不可欠であるとのコンセンサスがあるにもかかわらず、サダムはその真実を知らない。フセイン国王、サーレハ大統領、アラファト議長は、サダムに真実を告げておらず、彼等は何としてもサダムに真実を告げなければならない。彼等は、当国（サウデイ）にクウェイトからの撤退は不可欠と告げているとしているが、実際は違ふと思う。サダムは彼等に対し、彼等は当事者でもないし、むしろイラクのクウェイトへい合により何百万ドルもの利益を得るではないかと言つているのだろう。自分はフセイン国王に反対ではなく、ジョルダンの安全を望んでおり、何の見返りも要求せず、相当の援助をしてきている。現在の事態が続けば、いずれフセイン国王はサダムに対し、撤兵しないと大変な事になると真げんに要請するであろう。しかし、残念ながら、これまでフセイン国王は、イラクに対し撤兵しろとは言つていない。結局は、フセイン国王、サーレハ大統領、アラファト議長とも、自分が過ちを犯したことを知るだろう。

(8) イラクがクウェイトから撤退して、イラク・クウェイト間の問題が話し合いによつて解決されること

電信写

を希望しており、現在は情勢がどのように展開するか見守っている状況である。日本国民のすべてが問題の平和的解決を望んでいると信じている。戦争は一たん始まれば、いつ終るかかわからず、だれも戦争を望んでいない。サダムは全世界を敵に回し、戦闘を行う積もりであろうか。ある一国に対し、陸・海・空の完全な制裁が行われたのは史上初めてである。この制裁は、サダムに対し、戦争が起つたら大変だと分からせるためのものである。軍事力は、イラクそのものに対しては行使されないだろうが、イラクのクウェイトからの撤退のためには行使されるかも知れない。国連加盟国たる独立主権国家を侵攻・占領して、それが続くことは有り得ない。

(9) 貴総理にわが国の立場を説明し、これに理解を得られることは、非常に有り難い。二国間関係は非常に友好的であるが、今後更に全ての分野において強化させていきたい。また、貴総理及び日本国民に対し、その多国籍軍及びしゅうへん国への援助について感謝の意を表したい。この貴国の行動は人道的見地に立つものであると同時に、貴国の望んでいる国際的こうけんの強化につながるものである。現在、サウデイ・アラビアにはエジプト、シリア、モロッコ、更にはパキスタン、バングラデシュも軍を派遣しており、これら諸国への援助も検討してほしい。

4. 以上に対し、海部総理より以下の通り述べた。

現下の情勢の中で、貴国王が心をいためながら問題の平和的解決を求めていることに、改めてけい意を表す。日本の立場は明確であり、第二次世界大戦の経験からも、武力による侵攻は許されずとも原則に立つて、問題の平和的解決を求めるとの立場であり、この方針は今後ともけん持する。武力による侵攻を認めれば、弱く強食の世界を再現することになる。問題の平和的解決に向けた貴国王及びサウデイ・アラビア国民の努力を全面的に支持する。

5. ファハド国王より次の通り述べた。

サダムがまず最初に理解すべきことは、国連及びソ連を含む国際社会全体を敵に回し軍事的圧力を受けているという事実である。これは、史上初めての素晴らしい国際協力であり、米ソがこれ程重要なことで意見の一致を見たことは信じがたいところであり、イラクはこのことを理解すべきである。現在は米ソを含む国際社会全体が問題の平和的解決に努力しているが、これがうまくいかない場合には軍事的手段をとらざるを得ないかも知れず、その場合イラクは大きな損害をうけるだろう。サダムはこのことを良く分かつてほしい。ソ

電信写

連の代表団がイラクを訪問しているが、今やでも明日でもサダムが撤退をすると決断してほしいが、その希望はうすいであろう。ひ感的に考えてはいけませんが、もうしばらく待つていたい。2、3日後にでも、貴総理に、イラクは撤退をし、クウェイト正統政府の復帰が実現したと報告したいものであり、その際には、両国でおいおいをしたい。

6. これに対し、総理より以下のとおり述べた。

その見通しが実現することを期待したい。アンマンでラマダン第一副首相に会ったが、「ラ」はクウェイトは自分の国の一部であると言ったので、自分より、クウェイトは国連及びアラブ連盟加盟国たる独立国家であり、クウェイトからの撤退、クウェイト正統政府の復帰、全外国人の出国の自由を実施すべきであると述べるとともに、イラクは国際的にこ立しているということを指摘した。今後とも、わが国独自の立場から、問題の平和的解決に努力していくが、経験の深い貴国王も、強力なリーダー・シップをもつて努力していただきたい。

7. これに対し、ファハド国王より次の通り述べた。

出来るかぎりの努力をするが、相手がみみを傾けてくれなければどうしようもない。サダムが国外に送る代表団はテープ・レコーダーのようにサダムに言えといわれたことを言っているだけである。どうして、そのようになつたか不思議であるが、イラクの体制が変わり、イラクの代表団が自分の言ばでしゃべる日が来てほしい。改めて、貴総理の今回の当国訪問は、短いご滞在ではあつたものの、非常に有意義であることを申し上げたい。今日の危機が解決し、平和がもどつたら、自分はぜひ訪日したい。

8. 総理より、以下の通り述べた。

ぜひ、訪日していただきたく、わが国の皇室及び国民をあげてお待ちしている。即位のれいにはサウード外相を派遣することとしていただき、感謝申し上げます。今後とも両国関係が発展していくよう、自分も努力していきたい。

9. これに対し、ファハド国王より次の通り述べた。

いかなる努力も良い結果に結びつき、両国の利益にもなるものである。最後に一言申し上げたいが、当国に駐在するオング大使は、両国関係発展のために大変努力をされており、これはお世辞ではなく、本来はご本人のいない席で述べるべきことであろうが、本当のことである。

電信写

10. 最後に、ファハド国王^ハ、立ち上がりながら、英国女王たいかん式に来ておられた皇族の方はどなたであつたかと確認を求め越したので、総理より、現在のてん皇へい下が皇太子のころ出席されたと答えたところ、ファハド国王は、貴総理より、てん皇へい下及び他の皇族方によろしくお伝え願いたい旨述べ、会談を了した。

イラク、イラン、ジョルダン、シリア、エジプト、GCC、イエメン、チュニジア、米、英、仏、ソ連、中国、国連、OECD代に転電した。お見込みにより、その他関係公館に転電願いたい。

(了)